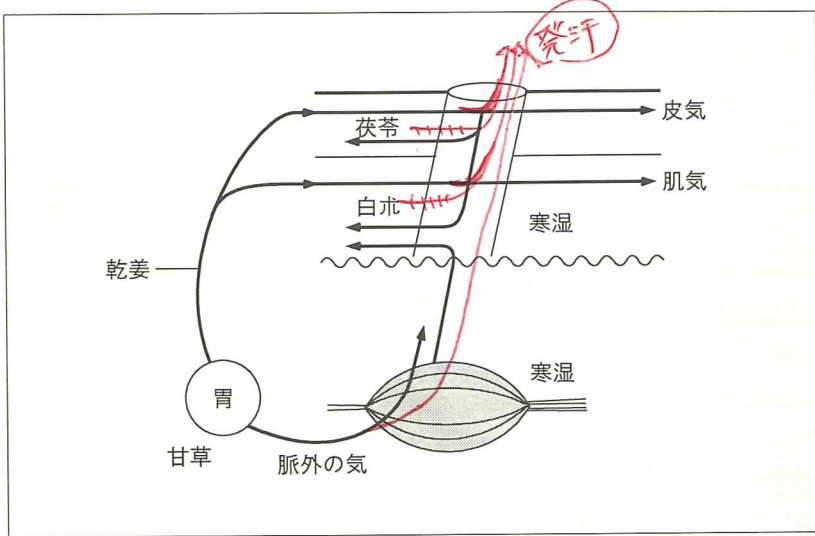


干姜四兩の干姜にて燗汗も可能である
本經；乾姜，…温中止血，出汗

甘草乾姜茯苓白朮湯

処方解説

乾姜四兩，甘草二兩にて胃を温め，助け，鼓舞する。その結果脈外の氣，皮氣，肌氣は温められ，巡り，茯苓，白朮で皮・肌の還流をはかる。その結果，肌・肉とりわけ腰部の肌・肉に存在する寒湿は除かれる。



この処方において、外殻の湿の存在に由来するが、白朮は二兩しか使用していない。そのかわりに乾姜四兩も使用している。蒼朮も併用して、「腰中即温」とあるから四兩の乾姜にて熱く鼓舞された胃氣が外殻を巡り、その熱氣により、湿を汗として排泄するに役立つ。甘草附子湯が「风湿相搏」の場合に白朮を二兩しか使用しているが、附子一枚、桂枝四兩の併用にて燗汗の還流を促している。

傷寒論・弁可発汗病脈証併治第十六第79条「五苓散」と金匱要略・消渴小便利淋病脈証併治第十三第4条「五苓散」は同じ。

弁可発汗後病脈証併治第十七第102条「五苓散」と第71条「五苓散」は同じ。

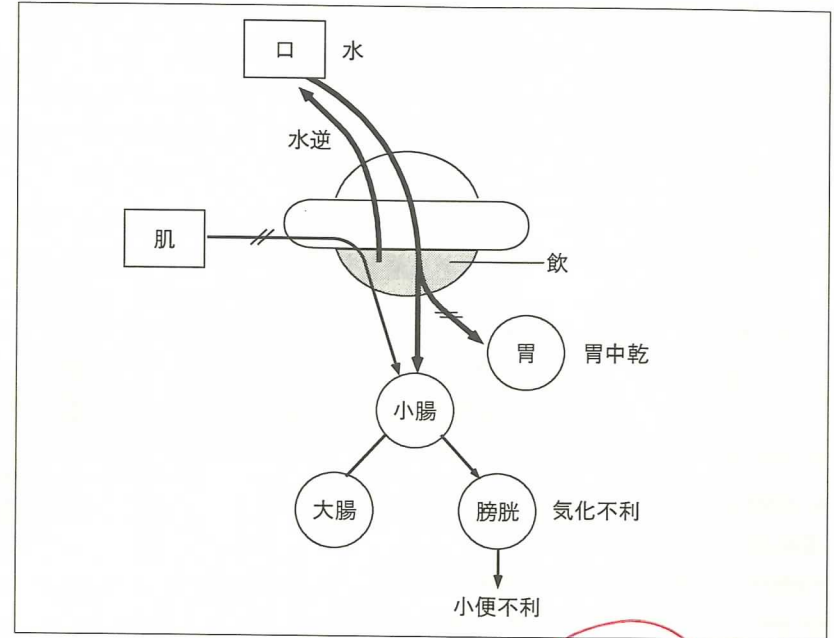
弁可発汗吐下後病脈証併治第二十二第277条「五苓散」と第156条「五苓散」は同じ。

五苓散総論

五苓散の条文は、傷寒論に8条、金匱要略に4条（茵陳五苓散を含む）あり、そのうち金匱要略の2条は、傷寒論の第71条、第74条と同一である。したがって条文数としては10条となる。

五苓散証は、発汗後、あるいは他の誤治、あるいは疾病の経過の中で、胃の津液を失い胃中乾の状態を呈する。一方、三焦の気化作用が失調し、三焦の水道とりわけ肌一心下一小腸一膀胱への還流路が不利し、これらの場所には湿や飲が停滞する。これは胃中乾とは逆の状態である。また膀胱の気化作用の失調による小便不利は、三焦の水道の停滞をさらに憎悪させている。ただし三焦の機能が失調し、湿や飲などの病理産物が存在するにもかかわらず、その失調の状態は、実は比較的軽度である。1回わずかに一方寸七（約1.0g）の散剤を1日3回服用することで、三焦の水道の機能を回復させれば、水道は流通し、その後に多量の温かい水を飲用すると、胃に納まり、胃の乾きを潤すことが可能となる。三焦の水道が機能していない時に水を飲用しても、すぐに吐いてしまうか、胃に入らず心下から小腸、膀胱に流れ、津液として利用されることはない。外殻の湿は、還流路の回復により利水されるが、腠理の機能が回復すれば、発汗によっても解消され得る。風邪が存在していても発汗により外泄される。

五苓散証においては、肌一心下一小腸一膀胱への三焦の水道（還流路）の機能失調が問題となるが、特に重要なのは、心下の飲による心下の昇降出入不利、および膀胱の気化の失調である。



処方解説

五苓散一方寸七（約1.0g）を1日3回~~水~~で服用する。そのあとで多量の温かい湯を飲用すると、多量の汗が出て治る。条文にはないが、当然利水の治癒機転もある。

- 白朮、沢瀉 —— 肌水
 - 茯苓 —— 皮水
 - 白朮、沢瀉 —— 心下の飲
 - 猪苓、茯苓、沢瀉 —— 膀胱の水飲
- } に使用する。

また猪苓は、直接的に膀胱に作用し、利水作用を高める（排尿作用を発揮する）。

桂枝は全身の三焦気化作用を高め、例えば腠理の機能を改善し、残存する表邪を自らの力で外散させる。あるいは膀胱の気化を高め、小便不利を治す。

五苓散によって肌一心下一小腸一膀胱一尿という還流路（三焦）の機能

おもゆい

180 (米湯)

トウ

181

但心下痞者、此以医下之也。如其不下者、病人不恶寒而渴者、此転属陽明也。小便数者、大便必鞭、不更衣十日、無所苦也。渴欲飲水、少少与之、但以法救之。渴者、宜五苓散。

「太陽病で、脈は寸は緩、関は浮、尺は弱であり、発熱し、汗をかき、また悪寒し、嘔ぜず、ただ心下痞するものは、医師がこれを下したためである。もし下さないもので、悪寒せず渴するものは、陽明に転属したのである。小便数のものは、大便が必ず硬くなる。十日間大便が出なくても、特に苦しむことはない。渴して水を飲もうとすれば、少々水を与える。ただ法をもってこれを救う。渴するものは、五苓散が宜しい。」

(太陽病で、脈浮、発熱、汗出、小便不利し、渴するものは、第71条、第73条、第74条のごとくに、五苓散の主治である。)

条文中、「如其不下者、病人不恶寒而渴者、此転属陽明也。小便数者、大便必鞭、不更衣十日、無所苦也。」以外の病理は第71条、第156条と同じであり、五苓散の主治である。

第386条 霍乱、頭痛、発熱、身疼痛、熱多欲飲水者、五苓散主之。寒多不用水者、理中丸主之。

「霍乱病で、頭痛、発熱、身疼痛し、熱が多く水を飲みたがるものは、五苓散がこれを主治する。寒が多く水が欲しくないものは、理中丸がこれを主治する。」

霍乱病(太陽病とは異なる)で、邪が口から胃に入ったため、胃での邪正闘争が惹起されるが、守胃機能が衰え、胃津は心下に追い出され、胃中は乾燥して熱をもち、「多く水を飲みたがる」。追い出された胃気は肌へ向かい「発熱」する。また守られない胃気は、心下から直達路を經由して頭部へ行き「頭痛」する。肌や直達路に胃気は向かい、上方の肺・心包へ向かう胃気は減少し、脈外の気の減少とともに肉中の営血も走れないため「身疼痛」する。いくら水を飲んでも心下の不利と膀胱の気化失調のため胃津に変化せず、また尿としての排泄も減少し心下や肌に溜まる。これを五苓

本条文の病理は苓桂朮甘湯に近い。ただし心下の飲は、心下の機能失調により生じており、五苓散一方寸匕（約1g）を1日3回投与すれば改善し得るものである。苓桂朮甘湯証の心下不利に対して、たとえ五苓散を投与したとしても、心下の飲や腎の水気の量が多く、薬効が発揮されない。この場合、やはり五苓散ではなく湯液の苓桂朮甘湯が必要となる。

消渴小便利淋病脈証併治第十三

第4条 脈浮小便不利，微熱消渴者，宜利小便，発汗，五苓散主之。

第5条 渴欲飲水，水入則吐者，名曰水逆，五苓散主之。

金匱要略・消渴小便利淋病脈証併治第十三の第4条，第5条の条文は，傷寒論第71条と第74条に同じなので省略。

黄疸病脈証併治第十五

第18条 黄疸病，茵陳五苓散主之。

「黄疸病，茵陳五苓散がこれを主治する。」

肌—心下—小腸—膀胱へと還流される通路が機能せず，小腸は分別を失い，一部の濁が肌に游溢し「黄疸」を生じる。茵陳五苓散で還流路を通路すれば，黄疸は治る。

◆黄疸病補足・小便不利について

- 小便不通——穀疸
- 小便必難——穀疸
- 小便不利——酒疸
- 小便不利——大黃消石湯，茵陳蒿湯（傷寒論第260条）
- 小便自利——勞疸
- 小便自利——小建中湯

散主之。可以互微矣。但兼主微風脈緊頭痛一句，即湯方処主也。」と、文蛤湯と文蛤散に錯簡があると指摘している。我々もこの意見に賛同する。

ただし「兼主微風脈緊，頭痛」の条文は，文蛤湯の適応症と考える。

胃熱の存在する病証に対しては胃熱も清する。「兼主微風脈緊，頭痛。」の条文は，寒邪が腠理を外束し，風邪が筋肉に侵入し，大青竜湯証と同じように邪正闘争の結果，鬱熱が発生し「脈は緊」となる。鬱熱が胃に伝わり，胃氣が守られず，胃氣は心下から直達路を上昇し「頭痛」がする。文蛤湯により邪を發汗し鬱熱を清熱すれば治癒できる。

処方解説

	麻黄	文蛤	桂枝	石膏	大棗	生姜	杏仁	甘草
文蛤湯	三両	五両		五両	十二枚	三両	五十枚	三両
大青竜湯	六両		二両	鷄子大	十枚	三両	四十枚	二両
越婢湯	六両			半升	十五枚	三両		二両

・参; 石膏 鷄子大 = 1/3升 ≡ 五両

文蛤湯は大青竜湯に似ている。麻黄が半量という以外は，石膏（五両≡75g，鷄子大≡80g），大棗，生姜，杏仁，甘草の量はほぼ同じである。

文蛤湯の投与後「汗出即癒」とあり，この湯が發汗と清熱を兼ねていることがわかる（この点も大青竜湯に近い）。寒邪が皮に外束し，「肉上粟起」しているが，皮の病理は大青竜湯ほどではない。したがって麻黄は三両（大青竜湯は六両）を用いて皮氣を走らせれば，發汗機序も回復する可能性は高い。生姜は，胃氣を全方向に供給するが，麻黄との併用で發汗を助ける。

- 麻黄 ①胃→肺→皮氣↗
 ②胃→肺→心包→脈外の氣↗
- 生姜 胃→肌氣↗

文蛤散

条文

金匱要略・消渴小便利淋病脈証併治第十三

第6条 渴欲飲水不止者，文蛤散主之。

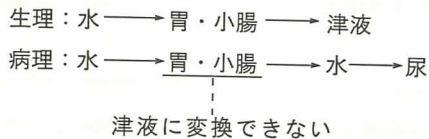
金匱要略・嘔吐噦下利病脈証治第十七

第19条 吐後渴欲得水而貪飲者，文蛤湯主之（文蛤散主之）。

傷寒論・141条（文蛤湯の条文と考えるので、ここにおいては省く。）

条文解説

どちらの条文も、胃・小腸における外の水を内なる水（津液）へ変換する機能が失調し、そのためいくら水を飲用しても、水は胃を素通りして尿に出ていくので、津液は増産されない。このような病証に文蛤散を使用する。



参考条文

第141条 ……寒実結胸，無熱証者，与三物小陷胸湯，白散亦可服。

白散方 桔梗三分 巴豆一分去皮心熬黑研如脂 貝母三分
上三味為散，……強人半錢匕，……病在膈上必吐，在膈下必利。……。

第166条 病如桂枝証，頭不痛，項不強，寸脈微浮，胸中痞鞅，氣上衝咽喉不得息者，此為胸有寒也。当吐之，宜瓜蒂散。

瓜蒂散方 瓜蒂一分熬黄 赤小豆一分
上二味，各別擣篩，為散已，合治之。取一錢匕，以香豉一合，用熱湯七合煮作稀糜，去滓，取汁和散，温頓服之。不吐者，少少加。得快吐乃止。諸亡血虚家，不可与瓜蒂散。

以上、白散、瓜蒂散は病理産物（無形の熱，寒痰）が膈上・胸に存在し、これを吐くことにより治癒機転がおこっている。

条文解説

金匱要略・嘔吐噦下利病脈証治第十七

第13条 嘔吐而病在膈上，後思水者解，急与之。思水者，猪苓散主之。

「病が膈上にあり，嘔吐した後に水を飲みたいと思う者は，急ぎこれを与えよ。水を思うものは猪苓散が主治する。」

胸・膈・心下に飲が存在し，胸・膈・心下の昇降不利を来し，胃気が上逆して「嘔吐」する。嘔吐した後に「水を飲みたいと思う」のは，嘔吐により胃津を失ってしまうからである。

処方解説

茯苓で胸・膈の飲をさばき，白朮で心下の飲をさばく。猪苓で膀胱の気化を高めて，飲を尿から排泄する。

たものである。治療により機能障害は改善しても、組織の損傷は残存する。

舌を例にして説明する。傷津あるいは水の質的変換失調により津液が不足すると舌は乾燥し、口渴する。ただし水分が補給されれば舌は元の状態に復帰する。これに対して慢性的に舌の表面および組織の津液が不足すると、舌の組織そのものが損傷を受け、一部は萎縮し、その結果裂紋を生じる。いったん生じた裂紋は、治療により機能的な回復をみたとしても、残存しつづける。いわゆる陰虚証という病態は、このように一部の組織の機質的損傷が生じているのである。

(『経方医学2』P149 補津と補陰について参照)